

「さっき父さんが外で倒れて救急車呼んだから」

3年前の夏、長男と一緒に参加していた社会人チームのサッカー練習後、立ち上がる時に意識が遠のき、熱中症の疑いで四十代の夫が救急搬送されました。

そこから色々と検査した結果、少し前から腫れが気になっていた右足首の上のすねの部位が、軟部肉腫と診断され闘病生活開始となりました。

2ヶ月入院して抗がん剤の投与。夫の病気の特性上、効果の程は五分五分の予想と聞いていましたが、結果は思わしくなく、秋には手術で右足の膝から下を失い、しばらくは松葉杖を使用することになりました。

そこから義足をオーダーメイドで購入し、資金のやりくりもしながら、病気の経過を見守っていくことに。

当たり前でできていた階段の多い家での暮らしも、家具の配置を変えたりちょっとしたスペースに体を支える手すりをつけたり、最終的には生活のしやすい家に転居することになりますが、我が家にとって非常に大きな転機となりました。

当初、夫はリハビリに通いながら仕事も続けていて、電車やタクシーに乗り、経路にあるエレベータの場所をひとつひとつ確認したり、障害者支援制度を使って左足だけで運転ができるようにパーツを装着した車を購入するため、色々な業者さんの担当の方と打ち合わせをしたり、移動に関する状況も一から立て直す必要がありました。

利用できる制度は色々であっても、誰に聞くべきかもわからなかったり、なかなか情報を得るのは至難の業で、障害年金についてもあとから知って急いで申請したり、障害認定を受けるまでにタクシー利用に補助がなかったり、本人からの申請が必須なものもあったり、体調のことを気づかいながら制度の利用までに様々な壁があることは、家族の中でも心理的に大きな負担となりました。

そんな中でも義肢装具師の方のアドバイスでスポーツ用のバネ義足を体験する練習会に参加したり、パラリンピック選手から直接アドバイスをもらえるような講習会に参加したりと、夫自身は休日も積極的に体を動かすことに挑戦していて、家族もそんな活動を支えながら、大きな勇気ももらっていました。

思うように体が動かなくても、義足で立つこと、歩くこと、走ること、しばらくはそんな動作を一つずつ確かめながら、そのステップを何度となく繰り返していく。義足に詳しい方に聞きながら、試行錯誤を繰り返す。言葉通りに一步一步挑戦して、夫の生活が軌道に乗り始めたところで出てきたのは、「やっぱりサッカーがしたい！」という思いでした。

関西にもアンプティサッカーという競技に挑戦しているチームがあるのを知り、まずは

体験会に参加。

アンプティサッカーは、足がないか障害がある人たちがサッカーをプレイする競技で、「amputee」は（切断者）の意。

アンプティサッカーにはいくつかの特別なルールがあり、選手は義足を装着せずにクラッチと呼ばれる杖を両手に持ちプレーを行います。腕に障害のあるキーパーが一名と、フィールドプレイヤー六名で、オフサイドは無く、クラッチでボールに触れるとハンドとなり、スローインではなくキックインといった点が通常のサッカーとの違いとなります。

夫はそこから練習会に何度か出てきましたが、今では毎月練習に参加していて、チームメイトに日本代表の十代の若い選手もいる中で、同じユニフォームを着て試合に出場することもできたり、技の光るプレーを目の当たりにして、多くの刺激をもらっているようです。

病気を知った時、夫が足を失うことに家族全員がもはや絶望感しかなく、先の見えない暗闇の中にいるような辛い思いでいっぱいになることもありました。いま周りには義足を使いながら様々な事に挑戦している人が本当にたくさんいて、最終的にはどんな状況になっても、前を向いて乗り越えていけるそれぞれの人としての強さに、大きな希望と勇気を感じさせてもらっている日々です。

アンプティサッカーは全国各地にいくつかチームがありますが、毎年秋には関東で日本選手権が開催されます。

我が家は関東に親せきが多いので、昨年初めて参加した際、しばらく会えていなかった家族と観戦できる貴重な場となりました。

今年も勇気をくれる夫の姿に、秋空のもと、みんなで声援を送る1日を過ごすことができそうだし、これからも毎年の恒例行事として楽しみを与えてくれるアンプティサッカーとの関わりは、我が家がぐんぐんと前に進むための原動力になっていってくれそうです。